日本時間生物学会第15回学術大会を主催して

富岡憲治
岡山大学大学院自然科学研究科

2008年11月8日、9日の2日間にわたって、岡山大学五十周年記念館を主会場に日本時間生物学会第15回学術大会を開催した。前年度には東京で第2回時間生物学世界大会、日本睡眠学会との合同大会として開催され、次年度には大阪でアジア睡眠学会・日本睡眠学会との合同大会として開催されることが決まっていた。2008年度はこれら大きな会議の狭間であり、地方でのどちらかというと小規模な集まりとなることが心配であった。岡山での開催は、生物リズム研究会時代の1993年に中島秀明先生が主催されて以来15年ぶりであった。そのときには確か岡山ロイヤルホテルを会場に、錚々たる先生方が出席された記憶がある。現在岡山の通常会員は3名で、お引き受けしたものの不安で一杯であった。会場に関しては、岡山駅近くの会議場も一度は考えたが、経費面で厳しいことから大学を使用することにした。

特別講演は1件で、初日の午前に内匠先生（大阪バイオサイエンス研究所）の招聘で来日された、フリブール大学（スイス）のUrs Albrecht先生に「Clocks, brain function and dysfunction」のタイトルでご講演いただいた。学術奨励賞受賞者講演は1件で、基礎部門で受賞された小柳悟氏（九州大）が「体内時計の分子機構を基盤にした抗癌剤の創薬・育薬研究」と題して講演された。詳しい内容は本誌掲載の氏の受賞記念論文を参照されたいが、時間生物学的な観点を導入したゲノム創薬による抗癌剤の開発に向けて熱い思いが語られた。

シンポジウムの内容については、基礎系と臨床系のバランスをとり、かつ前年度の国際会議や学術大会で取り上げられたものはできる限り避け、しかもなるべく新しい視点でのものを取り上げるように考えた。臨床系からは「総合的機能評価と生体リズム」、「時間治療の現状」の2つを、藤村昭夫先生（自治医科大）、大戸茂弘先生（九州大）、大塚邦明先生（東京女子医大）にオーガナイズ頂いた。基礎系のシンポジウムとしては、「日周時計から季節時計へ—時計分子と脂質代謝」を石田直理雄先生（産総研）にオーガナイズ頂いた。いずれのシンポジウムも活発な討論が行われ、有意義な会となった。またワークショップとして「様々な時間軸の生態リズムと生物多様性」を宮竹貴久先生（岡山大）にオーガナイズいただいた。時間生物学の中でも短い周期のもつ意味から、何十年にも及ぶ周期性まで、広い範囲の周期性の持つ生物学的意義が討論され、参加者の反応も良かった。特別講演、シンポジウム、ワークショップでお世話頂いたオーガナイザーの先生方、また発表頂いた先生方に深くお礼申し上げる。

例年、一般発表はポスター形式で行われている。ポスターでは十分な討論ができる反面、聞いていただける方はどちらかというと限られている。一方、口頭発表では、発表者は決められた時間の中で内容を要領よくまとめて話し、聴衆をひきつけかつ理解してもらわねばならないが、多くの方に聞いてもらえるというメリットがある。そこで、今大会ではこのような口頭発表の積極的な面を引き出したいと考え、一般発表に口頭発表を復活させることにした。さらに、若い方々にも積極的に学会進行に関わっていただけるよう、口頭発表の座長は、前の演者にお願いすることにした。初めての方にはずいぶんと緊張されたかもしれないが、ほぼ順調に進行でき、ご協力いただいた演者の方々にこの場を借りてお礼申し上げる。また、発表後の質疑も非常に活発であり、本学会の活力を感じた。

発表演題数は、特別講演1題、受賞者講演1題、シンポジウム3件（14題）、ワークショップ1件（6題）、一般演題は99題で総計121題であった。事前登録者は149名であったが、当日参加が60名を超え、嬉しい悲鳴を上げた。当日入会される方のためにかなり多めに会誌を準備していたが、それも早々に底を突いてしまった。当初の予想をはるかに超えて、多数の会員の方々に参加頂き、主催者側としては大変ありがたく感謝している。今回の大会はすべて基礎

系のしかも、理学系・農学系の会員と学生のみで行った。恐らく臨床系・医学系の学会の運営方式とは異なる点が多々あり、参加者の方々には奇異な感じや場合によっては不快に思われることがあったかも知れないが、ご容赦いただきたい。最後に、本大会に皆様をお迎えできたことを感謝するとともに、会員皆様のご研究のますますの発展を心よりお祈りいたします。